武器考證　二十四

番外書册

和書門
類 一七二五八 號
二三〇 函
一〇 架
二三 冊

内閣文庫
和書 類
一七二五八 號
二三 冊
一五四 函
一 架

内閣文庫
番號 和 17258
册數 23（16）
函號 154 4

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite

国立公文書館
National Archives of Japan

武器考證卷十四

江府　扈從隊士伊勢平藏貞丈輯

淺草文庫

書目

文德實録
永昌記
上堅抄
大橋歴代記
今川了俊道行振
下學集
新編鎌倉志
泂風抄
藻塩草
頼政家集
武家儀式
太閤記
親長記

国立公文書館
National Archives of Japan

範輔記
野府記別記
續江談抄
槐林記
愚昧記
兼實公記
園槐記
江談抄
本間流聞書
秀郷草子
園大暦
弓馬故實
奉公覺悟記
犬追物方聞書
法量物
西行記画巻物

○文德實録抜書

都良香撰　或昭宣公撰

善射藝　巻一　嘉祥三年四月己酉　親王顯善射藝有外家大納言之遺風等

射礼　同上　嵯峨天皇御豊樂院以觀射礼畢後勅諸親王及群臣各以次射○巻四　仁壽二年二月戊辰朔甲申　幸豊樂院以觀射礼

右ノ外觀射礼事多見タリ今畧之

武藝　騎射　巻二　嘉祥三年八月己酉　右兵衛督正四位下坂上大宿祢清野卒ス清野ハ大納言正二位田村麿第四子也少ヨリ慣家風武藝絶倫嵯峨太上皇在東宮時年十八為春宮少進是時天皇御武徳殿持簡天下騎射抜群之士廿人覽其才品爰清野以春宮少進獨參其選又歩射ノ士佐味香飾麿飯高常比麿清野等三人競射清野為三人之先鳴也

歩射　右ニ見タリ

細馬　同巻　仁壽元年九月庚午朔庚辰　遣使者向伊勢太神宮奉細馬八疋以充神ノ御室幣具ル

青馬　巻四　仁壽二年二月戊辰朔戊戌　幸豊樂院以覽青馬助陽氣也

公家

賭射 巻四（仁壽二年二月戊辰朔乙酉）幸豊樂院観諸衛府賭射公家以白布賜勝者其多筭者得布亦多先王舊式也

騎射走馬 同巻（同年五月丁卯朔辛未）天皇不御武德殿依停騎射走馬之観也○巻五（同三年五月甲午）停騎射走馬之観以災疫也

引強弓 同巻（同年八月己未朔壬午）散位百濟朝臣河成卒河成本姓余後改百濟長於武猛能引強弓大同三年為左近衛以善圖畫

角走 巻九（天安元年三月戊戌朔丁卯）有勅遣使神泉苑馬埒角御馬之走足也○同巻（同年五月丁酉朔庚子）有勅遣使武德殿馬埒令角走左右馬寮御馬各十疋○巻十（天安二年五月甲午朔戊辰）有勅公卿於武德殿馬埒令角走左右馬寮御馬各十疋令左右近衛各十六人左右兵衛各三人春宮坊帯刀舎人三人而騎射

○角走ハ競馬歟アラソヒハスルトヨムナリ

騎射 右ニ見タリ

○永昌記附録抜書

永昌記 一名宰記 参議為隆記

利雁矢（トカリヤ） | **将胡籙** | **鹿皮行縢**

治承四年十一月廿四日壬申陰時不定卯剋参宇治御所此間人々参集辰剋有出御無反閇為頓宮之故也時不仰渡之由皇居御同輿供奉公卿左大将（実定）別当（時忠）（帯白羽矢差利雁矢非楚忽事不言也史長一人不帯之）右宰相中将（実守）藤宰相（定能）近衛左少将有房（実教）（負胡籙差利雁矢出御之後参會）清経（胡籙同実教）公守等朝臣之外文武百僚如不供奉但介曹之士如雲相列予候御後中宮権大進光綱蔵人源兼時同候之右大将（宗盛著麹塵直衣鹿皮行縢）具數千随兵御後（本ノママ）半一町許為後陣

上堅抄抜書

上原豊前守堅家記

鞘巻　髪掻　下緒　色装之次第○是ハ東山殿大将御拝賀之時大名ノ御供廻ノ装束ノ事ヲ書タルケ条ナリ　○私云色装ハ装束トスヘシ　刀ハさやまきぬ（九ヘシ）
きかうがいハしやくどうさけ緒ハひきめ皮之

葛切付　同条　切付ハはくらにて我家の紋をはくらにてぬり付る之又ハうる
しにてもかく之

織鞦　袋鞦　坂東鞦　中総　同条　鞦ハ中ぬきありしりがい也　名をハ袋
しりがいとも云之坂東しりがいとも云之

黒作太刀　同条　太刀ハ黒塗なり金子（カナゴ）ハあかゞね但ぬり金子も不苦ひ
そりハしやくどう鞘ハ革也柄をさしさめまかずして持之中間ものの左に
まり之金子ハあかゞねにも銀にもする之

ブリく　ぶりくと云て丸物などよりもちいさく的をハ円丸物のごとく
こしらへて射る事あり是ハ寸法定らず縄の付様ハ上に乳二つ有へし
それより下に紐を付てよこ一まはりへしよこつなハなくよりよ
ばかりにて後之矢にあたりてよこ串丸物のりをとるへくまとにする
ありそれをハまとに残してし又射る之計的に御法ある矢なとハなき
之是ハ中古の人作出しける候之射事なとハ丸物のこそ一的の寸法

的のかけ様法式あるへからず但いつまでも土の上ハ六寸の掛て置ハ不入
くも同ことくにて有無し　○貞丈云近世賦乙ト書テブリ〳〵ノ字ニ用ユ此二字一向出所ナキ作リ字也用ヘカラズ

紙捻烏帽子掛　小結　鞘巻刀　引目下緒　色紫次才　馬付中間弐人なるへし
これ紋なし大口ハ不着けれ九人の役者ハこしてかしの烏帽子を着へし
かけハ紙より刀ハさやまき引ぬきかけかはい何もそのあれする也さけ
をハひきめ皮也

小結　一寸斑ノ調度掛　烏帽子掛　大からひろの時も烏帽子こゆひあるへし
烏帽子かけをすへし　又云一寸まんろれ調度（テウヅ）かけの時ハ烏帽子ふこゆ
ひあるへからす次こゆひを調度（テウヅ）かけに用る也之　又云うつろちの時も同
前烏帽子まこゆひあるへし　調度かけまハ常れ烏帽子かけをせる
まへし
○貞丈云てつばかけとも烏帽子かけ共云同事也之うつ寸を八うつを付る説これ少云当の烏帽子かけトハ白馬一寸まんろ也そなき当の烏帽子かけナリ

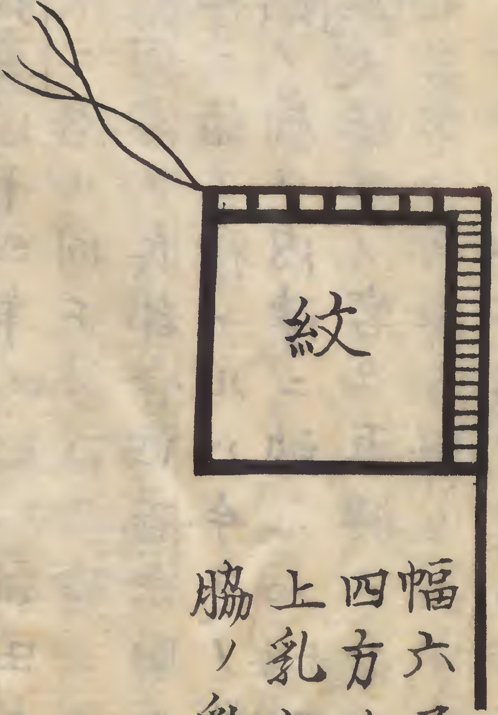
○大橋歴代記　浪合記之異本也桃井弥太郎義繁傳五拾巻之内トアリ永享二年記ス

笠印　鎌倉滅亡ノ後新田殿尋ラル今度合戦ニ味方ニ見ナレヌ笠印有ルト義助殿ニ問ケル傍折敷ニ一番ノ文字ハ下野ノ桃井ノ一黨山川大橋等也上野ノ桃井ニ紛レ候ニ依テ扇ノ紋ヲ付ス候山川ハ久下ノ一族也立五引領ハ足利治部太輔高氏ノ三男千壽王殿也ト曰後ニ千壽王殿ヲ義詮ト申ナリ

赤銅扇　同十四年正平十四年也新田太郎左衛門尉泰氏西上野碓氷ニ潜ル同正月百余騎ニテ武蔵国エ出張ス新田ノ一族同志ノ兵都合四百余騎三好野ニ陣ス宗綱桃井京亮右天神ニ詣テ禱ケルハ今度ノ戦ニ利ヲ得セ給ト持タル赤銅ノ扇ヲ内陣ニ納ル○按赤銅扇ト云ハ扇ノ木子ヲ赤銅ニテ造タルヲ云歟

勝旗　大橋是ノ宮ヲ再興ス永正十年八月也此殿ニテ四家七名字ノ者降名野々村宇佐美岡田等式例ヲ祭テ未代マテノ上中下座ヲ定ム四家七名字野々村宇佐美岡田宇津宮此中十五人此殿ニ出テ軍陣ヲ祭出神ノ時勝

旗ヲ建ル



幅六尺四方ナリ地ハ煉絹ナリ
四方ノ真中ニ家ノ紋ヲ付ル
上乳七ツ但乳ノ幅ヲ廣スル
脇ノ乳貳十七ナリ

○本書ヲ按スルニ右ニ是ノ宮ト云ハ尾張国海邉郡門真庄津嶋天皇ノ祠也所祭ノ神數社アリ四家トハ大橋岡本山川恒川也又七名字トハ堀田平野服部鈴木真野光賀河村也是ヲ七名字ト云四家七名字合テ十一黨ト云南朝宮方ノ忠臣也

弓取

○今川了俊道行ぶり 抜書 筑紫道之記也

上矢 梓弓 きびの中山とは備中と備前との二の国の中なればなるべし谷川はそこに流しより都のおそけく流れきてないきのさ瀬はをそでかゝりくしきやこの御社にも上矢一ツをぬさてくる川瀬は山なと打越て庭瀬といふ里にとまりぬこのあたりの名なれば何つさ弓矢陰に訛るなりひろさなるべき

丸木弓 生まゆみる本は丸木の弓取はすぐなるよりも力こそあれ

○貞丈按此歌弓製を以て釈するに本木といへるは真弓丸木を云なりまゆみの木は弓材の最上なるゆへ真弓丸木と名付るなりされば本木と云へるはまゆみの丸木を指て云へし本なる木を弓に削りて弦かけるよりは生まゆみなる木を弓に削りて弦をかけずとも津よく力ありてもしきよき弓をよめるなり又云弓の名にまゆみと云ハまゆみといふ木にて作りける故の名にあらず真弓に作るべき木なる故にまゆみの木となづけたるなり本をもて弓になづけたるにはあらず弓をもて本になづけたるなり真弓といふはまゆみの本は弓材の最上とする之丸木弓に作る古代の制なり

下學集抜書

文安元年　東麓破衲著

指懸決拾韘　指懸　決拾　韘　三字義同

幢幡　幢幡二字義同法場用之戰場用旌旗也幡與旛同字也幢與旛同

旌旗　旌旗二字義同

綅　綅作母衣言孩兒在母胎時頭戴胞衣以防諸毒也今武士臨戰場時戴綅以向敵蓋喩胞衣防毒也母胎與戰場生死二之之時也

鎧甲　鎧甲二字義同然日本俗呼甲為冑讀大誤歟

札　札鎧鉄也

鍪兜冑　鍪兜冑三字義同

腹當　腹當

筒丸　筒丸日本俗所言也但筒或作同大誤也是以人身喩竹筒也同字無体今用之事何哉云云

○貞丈云人身ヲ竹筒ニ喩ルトハ非ナリ筒丸ノ形ヲ竹筒ニ喩ルナリ

腹卷　腹卷　胸板　総角

脇楯　脇楯　昔神宮皇后異国對治之時適當懐妊玉躰甚大鎧囲不及其脇即以楯隱脇矣従是日本武士例而以為脇楯也

○貞丈云此説非ナリ日本紀等ニ其事見ヘズ

草摺　籠手　上帯　鉢卷　太刀　長刀

鐙 和字欤
鞘 刀子ノ家也
鐔 鍔 二字義同
釼 日本俗作釼大ニ誤欤劔字也
御多羅枝 最初截多羅樹枝以作弓故云尒也
○貞丈云此説非也御執ト書テオンタラシトヨム也
重藤 重或作滋
弭 弓本弭 末弭也
弦 雁股 征矢 鏑
蟇目 蟇或作引
箙 空穂 兎籠 的
鞍 金伏輪 伏或作覆
鐙 総鞦 泥障 轡 鞭 [illegible]
二字義同
手縄 腹帯 手綱 差縄
火威 鎧色謂之火威也
糟毛 河原毛 鹿毛 鴾毛 連銭葦毛 宿鴾毛 雪踏 栗毛
雲雀毛 鶴毛 落星馬 駮 班
○貞丈曰駮ハ駁ノ誤ナリ 班ハ斑ノ誤ナリマタラノ字ハ珏ニ从文ニナリ

物欤

笠懸 最初懸笠射之後用皮的也
犬追物 昔西域有班足王其夫人悪虐過人勧王取千人之首其後出生支那國為周幽王后其名曰褒姒滅國惑人死後出生于日本近衛院御宇号玉藻前傷人無極後化成白狐害人惟多時俗欲驅之先追走犬以試其射騎白狐知之化而成石飛禽走獣當其殺氣者莫不立斃故謂之殺生石于今在下野國那須野原也犬追物者始于茲矣但聴古老之口号雖不知本説且載之而已
○貞丈云右狐狩ヨリ犬追物始ルト云ヿ妄説也用ヘカラス
撿見 犬追物時在之
健児所 健児所中間之所居也

新編鎌倉志抜書

水戸侯儒臣河井恒久述　貞享元年成

刀 荏柄天神ノ々室刀壹腰正宗作ト云無銘長サ一尺三寸五分廣サ三寸五分今ノ世ニ小刀ト云製也指表ニ梅裏ニ天蓋不動ノ梵字倶利伽羅ヲ彫ル大進坊ガ彫物也鞘ハ黒塗也梅ノ蒔繪有リ　○貞丈云今世ノ小刀ノ製ハ古ノ打刀ナリ ツバ刀トモ云シナリ

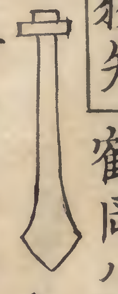
笄 右同神宝笄壹本後藤祐乗ガ彫物梅ナリ長サ九寸五分

劔 辻薬師ノ寺宝。劔壹口長サ三尺バカリ無銘大進坊ガ作ト云

平家ノ赤旗 補陀落寺ノ寺宝平家赤旗壹流幅二布長サ三尺五分アリ

九萬八千軍神ト書付テアリ

真羽矢 鶴岡八幡宮神宝真羽矢十五本箆ハ黒シ鏃ハ皆真鍮ナリ其中ニ



如此ノ鏃アリ長サ三寸二分又

如此ノ鏃アリ長サ一寸一分常ニハ異也　○貞丈按此矢征戦ニ用ヒシモノニハアラズ公家随身ノ胡籙ニ盛ル矢ナルヘシ

衛府太刀 右同神宝衛府太刀壹振長二尺餘無銘鞘ハ梨地ナリ

兵庫鍍太刀 右同神宝兵庫鍍太刀貳振共ニ二尺餘無銘兵庫鍍トハ云ヘトモ古法トハ異也

○貞丈云右兵庫鍍ノ太刀ノ圖写シ置タリ水戸家ニ兵庫鍍ノ太刀アリ軍器考圖式ニ載タリ其圖ヲ見レハ兵庫鍍ニハアラズ怒物作ノ太刀ナリ 彼家ニテハ怒物作ヲ兵庫鍍ト称シ傳ヘシユヘカノ神宝兵庫鍍ヲ見テ水戸家ノ物ト同カラザルユヘ古法トハ異也トイヘルナルヘシ古法トハ水戸家ノ怒物作ヲ本トシテイヘルナルヘシイカモノ作ト兵庫鍍トハモトヨリ其制別也怒物作ヲ兵庫鍍ト思ヘル誤ヨリシテ神宝ノ古制ヲ却テ古法ト異ナリト記セルナルヘシ

軍配團 江嶋ノ宝物太田道灌ノ軍配團ハ壹枚練物黒塗ナリ

首化粧 假粧坂ハ扇ガ谷ヨリ西方ヘ行ク坂也往還ノ道也相傳フ昔平家ノ大將ノ首化粧ニシテ實撿シタル地也故ニ名ヅク

○洞風抄抜書　鷹ノ故實書也記者未詳文明四年壬辰正月所記也書中ニ祖父卿申サレシト云語アルヲ見レハ公家ノ人ノ所記ナルヘシ

座居 問白拂とは何乃用にてはやらん　答小鷹をつかふ人座居をさせんためにこれを持也　問座居とハ何やらん　答大い鷹をまいるにつけて本も竹をなきに鷹き耻て鶉をとらせそむしらんとする時白拂にて額をなでれどもつりあぐる時やうやこぶしをいだせバあがる時こぶしにていかにもよくりふべし度々志つけぬれば後ハ白拂をうちふれどもこぶしへあがるこれを座居といふ故に白拂を座居拂といふ　○貞丈按座居とハ鷹を拳の上に座して居らしむるを云之甲州武田家に而軍兵を使ふにさいを用ゐられしハ此鷹の座居より思ひ付て作り始し故さいと名付しなるべし其形も鷹に座居をおしゆる白拂の形に似たりさいをさいと云も座居拂の畧語なるべし　軍のさいハ武田家にて始りて後世ハおしなべて用之謙信ハさいを不用して青竹の杖を持て指揮せられし　甲陽中傳合戰辨論に見えたり

○藻塩草抜書　連歌師宗砌作

移鞍｜和鞍　うつし鞍前驅也うつしとハ鞍乃名也朱さしたるありやまとくらと云ハふくりんかけたるあり　源氏　○貞丈諸鞍日記ヲ按スルニ移鞍ト云ハ唯鞍橋ノミノ名ニハアラズ惣躰ノ飾ノ名ナリ諸鞍日記ヲ見テ知ヘシ移鞍ト云フ飾ヲスル時ニハ鞍橋ハ覆輪打付タル鉢鞍ヲ用ルナリ

狛劔　狛劔ハ柄長くて輪のある也太刀劔ハ両方ニ刄のあるあり劔ニ似たり法むるハあらでまさくとしたる鐔のあるあり

太刀劔　右ニ見えたり

ヒシリ刀　ひきもくたるか

頼政家集抜書

源三位頼政歌集也

伏竹弓 戀部 心より外に中絶てる女のもとへつかハしける
おもひきやよにならす弓のふす竹の一よも君にはなれしとハ
○ふせ竹乃弓 夫木抄にもみえたり

駒立髪 旧部 馬上恋と云事を
たちかゝるあとに風ひき恋ゆく駒のたて髪露ふしに見

三ツ之御牧 旧部 海河恋
風ましろみ三河乃三牧に妹我岳ていくつひよこれ郡にかよふらむ

随兵
具足
腹巻取袖

葉ノ字衍文ナルヘシ下文ニモ唐紅具エタリ此所モ唐紅ナルヘシ

武家儀式抜書

室町將軍家引付　記者未詳

鎧威毛色品

康正二年七月二十六日御拜賀御時侍所随兵馬打次第（慈昭院義政御代）中間緋直垂着六人二行先行佐々木中務少輔（萠黄糸鎧馬鴾毛）太刀持（素袍着直垂緒揭緋）中間甲持腹巻袖取同張易持同搔副多賀豊後守（跡少々有之）一番多賀四郎右衛門尉（具足萠黄糸片赤馬栗毛）中間甲持腹巻袖取同張易持同太刀持（着素袍直垂緒揭緋）搔副五人二番藤堂九郎左衛門尉（具足黒韋馬黒糟毛）行列同前三番下河原周防守（具足黒糸片唐紅葉馬黒）同前四番多賀彦左衛門尉（具足黒韋片浅黄糸白糸馬栗毛）多賀次郎左衛門尉代五番毋里左京亮（具足浅黄糸片紅馬黒）安盛信濃守代六番松田帯刀（具足黒韋片白糸馬栗毛）隠岐代七番多胡宗次郎（具足黒韋片白糸馬栗毛）垣見代八番赤田信濃守（具足黒韋片白糸）九番松田兵庫助（具足黒韋片白糸馬鹿毛）十番長野又四郎（具足黒韋片白糸馬鴾毛）市村代十一番西部八郎（具足黒韋片白糸馬鹿毛）十二番匹田掃部助（具足浅黄糸馬鹿毛）十三番赤尾肥前守（具足浅黄糸馬鹿毛）十四番高宮小次郎（具足浅黄糸馬鹿毛）十五番左京亮（具足黒韋片白糸馬河原毛）十六番赤穴周防守（具足黒韋中白糸馬栗粕毛）佐

渡代十七番鹿目式部丞 具足赤馬 浅栗毛 黄糸片 慶増代十八番小足掃部助 具足洗華馬黒 十九番松田勘解由左衛門尉 具足黒浅黄黒糸片華 廿一番多賀新左衛門代二十番土橋修理亮 具足唐紅馬黒鴇毛片華 廿一番佐方九郎 具足洗馬黒 糸糸 鹿毛片華 赤 箕浦代廿二番多賀民部丞 具足黒馬鹿毛片糸白駿 廿三番河瀬彦四郎 具足白糸馬黒鴇毛片華 廿四番 具足紫馬栗毛 糸 廿南宮蔵人 具足茜糸馬黒鹿毛片華 廿五番二階堂備中守 具足紫糸馬栗毛 廿六番枚江帯刀 具足白糸馬黒鹿毛片華 四邊代廿七番山田彦左衛門尉 具足白糸馬黒華中 一圓代村井信濃守 具足白糸馬黒鹿毛片華

○貞丈按右ニ具足黒華片白糸ナトヽ見タルハ胴袖草摺等半分ハ黒革半分ハ白糸ニテ色ヲ易ヘテ威シタルヲ云即敷目ノ鎧也或具足黒華中白糸ト云モ准シ知ヘシ具足トハ鎧ノ事也具足トハスベテノ道具ノ事也鎧ハ軍陣ニ用ル道具ナル故武家ニテハ具足トモ物具ト云也 公家ニテハ装束ノ支タ物具ト云

太閤記抜書

小瀬甫庵作

赤地錦直垂 九州御出勢ノ条 秀吉公 天正十五年 三月朔日洛陽を立たまふ其日の装束にハ緋威の鎧鍬形打たる甲を猪首に着なし赤地乃錦の直垂いとはなやかに出立給ふ往年の人（老）おひなるハ粧ひよき出立云語を絶しけり ○貞丈按秀吉鎧直垂を着せられましゝ直垂ハ甲に着用しをかふられけるハいまだずして知べし秀吉の時まで八粧甲冑乃下に着用しさせられしを用ひられける右の文にて知べし着用しさせられ乃を在りしハ秀吉よりも粧後乃事ところアんゆき 追考秀吉ノ比ノ軍記多クハ鎧直垂ノ事見エズ其比已ニ廃レシヲ九州征伐ノ時再興アリシ歟其後又廃レシナルベシ

長巻 長巻五十人 長巻ハ三尺余ありし刀をさやなしに柄三尺余して歩行立の士に持せし也信長もきかひて百人程先に立ゆし今世ハまれ也

實名高頼

金襴直垂

無地カチン直垂

縫物直垂

○親長記抜書

甘露寺親長卿記

【鎧直垂】長亨元年九月十二日朝間陰（クモル）巳刻斗晴（ハル）今日征夷
大将軍従一位行權大納言源朝臣義尚進發江州佐々木
六角（實名可尋）御退治云々應仁一乱之後諸國寺社所領各押
領及度々雖有武家下知不及承引于今延引無盡期及此
儀云々但諸大名一向不参留擬分一人打前陣細川右馬
助供奉也此外自一番衆至五番衆参仕之外無人入夜畠
山尾張守進發云々權大納言（義尚）殿金襴鎧直垂重藤弓令負
胡籙馬（河原毛）懸総軍兵圍前後言語道断見物也武家輩
數多人數不知巨細之間不注載公家之輩（高倉）藤中納言入道
常祐（俗名永継）（カチン無地馬上）鎧直垂（日野）政資朝臣（鶴丸縫物鎧直垂）（梨子打烏帽子）諸大夫（烏丸）冬光
二人各着鎧直垂（高倉）永康朝臣（龍膽丸縫物鎧直垂）（廣橋）（日野町流）守光（縫物鎧直垂）
（同）各召具軍兵馬上軍兵多少依其分限仍巨細不注也此
外善法寺享清法印北野松梅院各直綴

【重藤弓】【胡籙】【総鞦】右ニ見タリ

【梨子打烏帽子】右ニ見タリ

聽着直垂

○兵部卿範輔卿記抜書

鎧直垂　次第十四日直垂ハ元武士之服之也爲直仕聽之文門之直衣相同也宣旨部類記ニ天慶ノ度平貞盛聽ニ著直垂ニ云云

○貞丈按文門とハ武門に對して云る詞也貞盛か直垂乃事野府記別記に見へたり直垂を着る事を聽されしとハ直垂ハ朝服にあらざるが故に是を着て參内するにハあらざる法也然るを直垂着て參内する事をゆるされし事を云なるべし　されバこそ文門乃直衣相同也と云へり　直衣着て參内ハあらざる法也　雜袍を聽るとて御免を蒙りて後直衣着て參内せし事あり　直垂を着るされしといふも是と同じ事なり

萠黄
裏ノ直垂
鎧上着直垂

○野府記別記抜書

鎧直垂 寛和元年十一月三日召覧彼祖父貞盛朝臣之直垂 萠黄 爲甲介裏悉損云々 ○貞丈按天慶ノ度ニ貞盛直垂ヲ著ル事ヲ聴サルト範輔卿ノ記ニ見タリ甲介ノ爲ニ裏悉ク損ズト云ヲ以テ考レハ上古ハ直垂ヲ甲介ノ上ニ着タルト見タリ甲介ノ上ニ着シテハ便利ナラザルガ故ニ後ニハ甲介ノ下ニ着スル事ニナリシナルヘシ又按裏悉損トアレハ是裏打ノ直垂也

紅梅綾直垂
緑綾直垂

○續江談抄抜書

鎧直垂 貞信公ノ記ニ天慶ノ度ニ云征東大將軍參議右衛門督藤原朝臣忠文赴東軍ニ予使時ニ名贈ニ金錢百文及精ノ好綾二端ヲ畢ヌ件ノ綾ハ着ス甲冑ノ表之料也色ハ以テス紅梅一ツ緑一ツヲ云云 貞信公の御餞乃ひゝれとて右あつ紅のうすきひゝれきてあつまへそ下られける ○貞丈按 野府記ノ別記に見ゆる貞盛の直垂ハ甲冑のうへに裹悉く損ぜとあり又ハ忠文に賜りし綾ハ甲冑の表に着せる料とありこれを以て考るに上古ハ直垂を甲冑の上に着せしけるなり河内なり然れとも便利ならさる故後に鎧の下に着せる事になりしなるへし後三年合戦絵なとにハ皆鎧の下に着したる様に画けり鎧此下に着せることを久しきことなり

蜀江
鎧直垂制度

○槐林記抜書

後徳大寺實定公記

鎧直垂 兼安元四月二日 晴 武官陣衣之事 直垂ハ以蜀江ヲ為勅免ト、餘ハ在於閫外之權ニ ○貞丈按 此時鎧直垂ノ制度ヲ始テ立ラレシト見ユ 蜀江ノ錦ノ直垂ハ勅免ニアラズシテハ着スル事ヲ得ザル也 餘在於閫外之權トハ閫外トハ京都ノ外軍中ヲ指シテ云也 餘トハ蜀江ノ錦ニアラサル東京錦倭錦ノ類ヲ云 蜀江ニアラサル錦ノ直垂ハ勅免ニ及バス軍中ニテ大將軍ノ心ニマカセテ諸侍ニ聽ス事ヲ云也 宗盛公ノ齊藤別當真盛ニ錦ノ直垂ヲユルサレシモ蜀江ニアラザル錦ノ直垂ヲユルサレシナルヘシ

蜀紅直垂
金副𦁤鞍
緋村濃直垂

○愚昧記抜書　三條實房公記

鎧直垂　論装馬具部

衣の色よろひ直垂ハ勅をかきりて（蜀欤）紅之か（にて候）たしかを色むまよ金副𦁤照りけるとも装るでこそかゝるきち（結構）かうをめ落させあふよハあやまちあゝふずるれすぐるなと思ひぬ　○同記曰治承初度競馬模陣戦被鎧直垂一番左源仲綱緋村濃鎧直垂具足云云中畧不吉更難例

○兼實公記抜書　九條殿記

鎧直垂 亮(スケノ)羽林(維盛)為ニ前右兵衛佐頼朝黨ノ討手ト今日出ル都ヲ予立テ車ヲ於南街ニ見物 中畧 羽林憚ニ皇都ヲ不着胄ヲ緑深キ鎧駕肥馬皆紅ノ蜀江ノ軍服會稽山之紅葉照サレ戎敵ヲ者手次ニ右馬允

緑深鎧 右ニ見タリ萌黄威ヲ云ナルヘシ

蜀江

○園槐記抜書

鎧直垂 宮ハ火威御物具蜀江直垂金龍堆御兜花文御握弓猶天帝降魔御姿ニ ○宮ハ大塔宮也

火威物具ハ 金龍堆兜 花文握弓 右ニ見タリ 花文トハ綾ニテ握ヲ巻タル弓ナルヘシ古書ニ花文綾ト云名アリ

○江談抄抜書

宝劔鞘付神璽筥鑰 巻二 又談曰御劔鞘有五六寸許物巻付人不知何物資仲卿自撰進之四巻云云故大納言教命云予昔三条院御宇時為殿上人参内自無名門主上御于殿上御倚子予謹跪候地上仰云可昇候小板敷者仰云御劔鞘有被纏付之物是何物哉汝有所聞乎者予奏云至愚之身難知如此事者又仰云猶可申者奏云不兼慥説但或人申云若是御辛櫃鎰欤者天氣有感後日景理朝臣相語云主上仰曰我問秘事衆人不知而資仲之所申已尤相叶所感也昔抑鎰事右相府仰也又在清慎公御口傳又江左丞記云神璽筥鎰纏宝劔之組纏篭之由見延喜御日記是秘事也非普通御説云云

壷切劔 巻三 壷切者為張良劔事 又被命云壷切昔名将劔云云雄劔ト云ハ僻事也云云資仲所説也○又曰壷切事劔壷切但壷切焼亡欤未詳件劔累代東宮渡物也而後三条院東宮之時二十三年之間入道殿不令献給云云其故藤氏腹東宮之宝物ナレバ何此東宮可令得給乎云云仍後三条院被仰之様壷切我以無益也更々アシカラズト被仰ケリサテ遂ニ御即位後コソ被進ケレ是皆古今所傳談也 云云

丙毛槐林

名馬名 巻三 高名馬名等○赤六○穂坂○十七栗毛○戀地○鳥子○尾白○榛原○翡翠○若菜○別栗毛○御坂○近江栗毛○三日月○本白○和琴○宇都(ウト)濱○穂檀糟毛○鳥形○花形○兄○野口○宮橋○前黒糟毛○後黒糟毛○望月○宮城○野里○尾花○日差○蝶額○大耳(カウジ)子○小耳子○白絃○夏引

聖徳太子劔銘 巻一 聖徳太子御劔銘四字事丙毛槐林吉切(言カ)槐林是切ニ守屋大臣ノ頸ヲ也 ○按軍器考ニ彼銘篆書ニテ丙子椒林トアリ丙毛槐林ニハアラス丙子ハ劔ヲ造ル年ノ支幹ニテ椒林ハ鍛工ノ名ナルヘシト云ヘリ

○本間流聞書抜書 記者未詳 古書也

大鳥羽 真鳥羽 大鳥羽とて十四枚あるをハ真鳥羽とて上也

小鳥羽 カラワシ 黒ツ羽 今小鳥羽とて十二あるをハかうしよしとて下なり又云かうしよし乃わろきをハ黒川羽と云なり

クレノ羽 角鷹(クマ)乃すゞはけをくしの羽と云之 ○すゞはけトハ尾ノ一上ノカサナル尾ナリ鈴付トカク

雑羽 鵰鷲鷲の外ノ羽ハ雑羽といひて鴻鵠鵜涂羽ハ乃半

ヒシヤク花 角鷹(クマ)の羽をハ出羽に白きのふくみある事よとうへしそれハ知らゆく花と云なり ○貞丈云知らゆくもなハひさごえなの物語ナリひさご乃むなハ白きものぞひさごハゆふがおのみナリ

蝿頭 又しろミをのこして羽とりつるを蝿頭と云なり ○前ニ同しく角鷹ノ羽ノ取やうへ

碁石 しろをちとある事よ羽とりつるを碁石と云 ○是亦角鷹ノ羽とりやうを云

生筈 逆筈 箭筈 生筈(オヒ)逆筈ヨ筈とて三のはぎやうあり生筈と云ハ竹のおひつる事よ末(ウラ)を上になしてはぐなり羽中よふしなくハ生筈よはぐへし逆筈といふハ竹のもとを上に成之羽中よふし有ハ逆筈よつぐへしヨ筈といふハはがさる之もがりのこと征矢なとを用なり

シキリハギノ事近世偽説アリ本間流ノ説古説ナリ秀郷草子ニ合タリ

シキリハギ しきりはぎと云ハ羽より五寸二分乃中程よりし上ゟそしきりたるしんまうのひろう梢などにこしらへて持に右あげしそぎて

アバラハギ　あばらはぎといふハ本はぎを式の巻などに巻てその下一すくなど羽さきを長く残してあばらに巻之

アハセハギ　あはせはぎにもほろをばにさへあはせはぎと云はきし是内羽を矢一ッに羽をうらとうらを合てはぐ之

弓木目　弓の本に松目あさぐら目小萩目とて三ありいろをよき中にあさうらめ上なるなり　○本ノ字ハ品ノ字ナルヘシ

イキナヒ　弓のにぎりより上一尺二三寸計上の名をいきなひと云へ秘事なるへし又云弓杖卅本 中略　左にていきなひをとりあつちのきも一杖斗立て其まゝ返さるを知へし

ニヤクトウ作ノ弓　ちやくとう作の弓と云ハ一尺ゝゝに籐をつゝふを云弦ハ尺藤法なり其中之かぶら籐をのぞきてあいだを一尺ッゝ立て巻へき之矢立りハ常のごとく成へし

コリハギ　これもはぎと云きじの内羽をうらずしてはぐべし

挟物　夾物ハ遠さ七杖ばかり立て弓ばかり(ユミナカ)よせて立へし夾物とあるハ折敷(オシキ)を四寸二分に切て切目の方を前の下になして地の上一尺に立へし串ハ挟めバ板の中程を深く挟むへし挟物ハ唐ぶさめの的を十六にきりて其内一也唐ぶさめの的ハ差一尺八寸なり夾物のくし長サ一尺二寸なり

保安元暦ノ記ニ執柄供奉行幸時府生番長平鎮左ハ鷺羽右ハ肅慎羽コレヲ新調ス鳥鷺ノ羽ヲソテ三ッ府ニ切續タリ云云軍器考ニ見タリ是ニキリ羽ナリ

○秀郷(ヒデサト)草子抜書

秀郷巻物事書　井露寺定成筆記

ニキリ羽　秀郷人間をこひ帰らむ事を都ふ龍女百年偕老乃契かぐくまどろとうあむ龍女ちからを及ばずして種々の引出物をあたへて帰しける其中に汝き俵一ありき又俵有り入物の米をとるに汝きず秀郷を俵藤太と名付けるなり又劔あり鍉を柄も一に作付ける金作之石流きるに如意宝珠をうけしつられり彼の末伝て今ハ流るぎの鋺とあらめ中とうや弓箭鐙ハありきひでさとの鐙に室丸(台マロ)平石(ヒライシ)とて二ッまで伝へ持て侍るなるハ彼鐙にや箭ハたつきり羽とやきしたつきり羽とハ白羽黒羽にてはぎまぜて侍るとぞ中伝へつり又硯一面あり水入所に竹一本生られり其竹を取り其節を硯水とあるに至まで有るも即宿といふる硯これ也竹生嶋ちかぶの神にまいらせてまつる彼社に今にいまさし侍るとぞや

室丸鐙　平石鐙　右にみえつり

○ニキリ羽トハ白ト黒ヲツキデニキリメヲ立テハグナリ白羽ニ黒丈アルガゴトクツギ合スルヲ云ナリ

園大暦抜書

中園（相国）内大臣公賢公之記

曹当作甲 国俗誤以甲為曹

兼好後ニ入道ス つれづれ草ノ作者

〔褐冑直垂〕〔小具足〕延文四年十一月六日畠山今日申剋許入洛直向将軍亭謁之即帰宅其勢此間漸々入洛今躰不及多勢褐冑直垂不及小具足於将軍亭勧一献云云

〔村滋藤梓弓〕延慶二年六月十四日左兵衛佐卜部兼好勤番当日之由自滝口之戸以内豎奏之退公之剋及日暮而荻戸之隅怪鳥二羽居庭上兼好朝臣自取胡簶之矢持村滋藤之梓弓而發怪鳥不誤落庭上一羽者似鴨而足有黒毛一羽者似鴈而其身赤醫儒之二道不辨其名有暫時化両狐去兼好朝臣之功堂上堂下感之

〔如法鋳劔〕〔足〕〔石衛〕〔責〕〔伏輪〕康永三年正月朔記曰嘉禄三年正月一日宮槐記云鋳劔藍滑装束青滑（称青滑者本名也）ト書タルハ藍滑ノ事也如法鋳劔ハ用赤滑不然之鋳劔ハ用青滑常事也然不法之鋳劔皆用赤滑尋常鋳劔之内ニ如法鋳劔トテ装束ノ所違タル所足石衛ノ所長シテ是如法ノ鋳劔ト強非異様ノ物只常之劔之内ニ装束ノ所如法鋳之玉居

之ト。由也如法ノ鋳劔トテ

ナトシタル也其外蒔繪螺鈿伏輪近來見之云云

三峯切付　三峯ノ切付トイフハ例ノ大滑無子細歟

赤地錦鎧直垂　褐鎧直垂　觀應元年七月二十五日美濃尾張凶徒以外之間武士多令差使中略義詮朝臣赤地錦鎧直垂不帶甲冑師直褐鎧直垂不帶弓箭其勢一二百騎歟昨今連々上洛云云

小具足　旗差　觀應元年十月十六日傳聞九州蜂起中略二十八日傳聞今曉卯刻將軍進發主人小具足帶弓箭武藏守師直以下帶甲冑相從其勢四五百騎云云或云師直旗差某於東寺南門前落馬損手仍於此所差替其仁

首實撿　文和四年南朝正平十年二月八日江州主上臨幸山門中略三月十三日煙火頗以充天中略十三日聞東寺軍旅悉沒落云云中略昨日分取首實撿頗及百許

眞巻弓　延元元年二月ノ条先日自或人許尋云眞巻弓ト号ハ何樣ノ物哉或說小弓歟或大弓ナ才覺區也愚存如何云云予所存眞弓ニ巻ニ藤及樺号之眞巻候近代以紙替樺等歟且勘出所見頗附人々日來所案歟　○貞丈云延元ノ比既ニ眞巻弓ノ詳ニ知タル人ナカリシト見タリ眞弓ニ藤樺ヲ巻クヲ眞巻弓ト号トハ推量ノ利口ニテ正說ニハアラス勿用夫木抄ノ琳賢法師カイカニセンママキノ弓ノトモスレハノ哥ヲ熟考スレハママキ弓ノ正說ヲ得ル也別冊ニ記ス

細鞦　康永三年九月十六日今日御幸供奉人宗雅朝臣隆邦朝臣教光泰成等也供奉人細鞦也

細烏帽子　引立烏帽子　平礼　貞和四年十一月廿八日條院御細烏帽子白襖御狩衣　春宮大夫引立烏帽子　大宮宰相細烏帽子　園前宰相細烏帽子　春宮大夫細烏帽子　別當平礼

楚鞦　連著鞦　臥太鞦　平臥鞦　觀應元年十月條勧修寺大納言談合吏御前辺何条御事候哉御禊行幸経方申沙汰未練在若已一向相代奉行仕候间窮尾本ノマヽ陪増無術之指淂候者毎事可参申入候抑鞦事御禊楚鞦連著不同候廷尉大略用楚鞦候尋常号楚鞦者臥太御構連著之者平臥若普通臥太之外号楚鞦初候哉若御所見候者可被示下候楚鞦者如藝御幸細候所用物可付杏葉候歟不審存候毎事期参入申候経顕誠恐謹言　十月十日　経顕上

洞院殿

○弓馬故實抜書

伊勢六郎左衛門尉平貞順之記　天文永禄比人

【村削弓（ムラコキ）】村削（コキ）の弓と云事ハ惣を赤漆ニ塗り本の所をこくへし口傳
こ紀括ある之ありしなうし何れも秘事の弓之

【重籐弓】重籐の弓と云事 籐まきたる弓之黒くぬり籐を白く塗る
之籐の長さ一寸斗間をおきて斗まきてつゝふへし本方のかしら籐不
法ひせうある事も紀しかるし口傳なるへし

【本重籐】にぎりの下を重籐にして握より上を二所籐にまきたる弓此事
本（モト）重籐と云之事ハ人ニ寄て評夥ある弓也当家の人ハ持ぬ之秘事
乃弓也

【弓一力二力】弓の一力（ヲ）二力（ラ）と云事ハむさと云ましき事之何をさし
ていふ様をさして一力二力と云へきやいまだ知れぬ事之一力二力と云ハ弓を削
る時本と竹を削りくだを手の内ニ握りて一束いふを一力手の内ニ二束
を二力と云之手の内此握紙の事法ゆくもにぎりぬよちくも握らず
能程ニ手此内ニ一束いふを云之これを一ちからにちくなる二ちか
らよちく成ると云之

【二人張三人張】二人張三人張と云事ハあへし四人張五人張なと云事

ハ主まりきこえその故ハ弓一張を大勢ハえつかれぬ故也一人して弦
をかけ二人弓をおさえ付是を三人張と云二人張ハ一人弦をかけ一人弓をおさえ是を二
人張と云又荒木なとの弓をひいても引きかくきハ又各別の義也

ウツボニ掛ル皮 **細ウツボ** うつぼに懸る皮の事虎皮半ヶ斑豹也常ニハ
猪鹿又ハ熊狸川うそあざらしなどの類也それより又さきなどもりて毛皮也そ
うまいその方を武ハ青漆赤漆など塗りてもよし若又熊を毛皮まで
よし大略細うつぼハ先を狸皮まてうまゞと青漆なとにまる也

騎馬ウツボ **細ウツボ** うつぼの事騎馬うつぼ細うつぼと云さりながら
おそうつぼとも云ふよきこと也

側白木弓 そむ白木と云ハ竹を赤く色又黒くもぬりて木を白く
して面を云也是も的弓也うつぼ付候などの時ハ必めく持ぬ弓也

手袋 やぶさめ此時ハゆかけとハいはずして手袋と云べし笠懸あまた限なき事也

矢筈 矢筈の事羽中に三方に書也是ハ平人も如此書べしおつとりの節
の遠矢ハ書ハ黄號也それより黄號ハさげ矢の遠矢にも遣也おつとりの遠
さげ矢の遠矢ハ出時ハむし一羽のとおり一方に書べし熊別名字并
書く也近世ハ立不足の名字官その内此誰と書く中にも武ニハなきこと

ウツボノ身 うつぼの身と云ハ征矢也但征矢の時ハおつかれの身をさへ
うつぼの身此時ハさげ矢を指入也此遠矢の儀也略義にハうしを
ぬるまでもうつぼ乃身の時ハさげ物しをぬる征矢の時ハおつかれふし
斗をぬる事も是ハ一腹の略義也

〇此条ニ征矢ト云ハおひ征矢也腹ニサス征矢ノ事ヲ云ナリ身ハ實ナリ

○奉公覚悟記抜書

貞丈家傳 室町殿時代之書

空穂之身	騎馬空穂	大和空穂	腰華	受緒掛緒

うつほを渡す事

又あまた候るよし申人ゆゆうふ存は先腰よりハうけをくみを残もこしに
きりくと巻て矢のぬくやうに持て可渡は弓とうつほ一度にもちかへ候て先
弓を渡て後にうつほを可渡は縦貴人なりとも納付けれはて先うつほ
より進候て後に弓をも進しうつほのる法式ハなきよし候し
矢のこらくるへし又うつほにも残さうしうるんを借用なとし候
射をし候てかへるしろし射あをそくるあまへかうは尤一ふくくろ也
まづうつほとゆは騎馬うつほのる也法体のうつほハやまやうつ
ほと可申也申候しなり

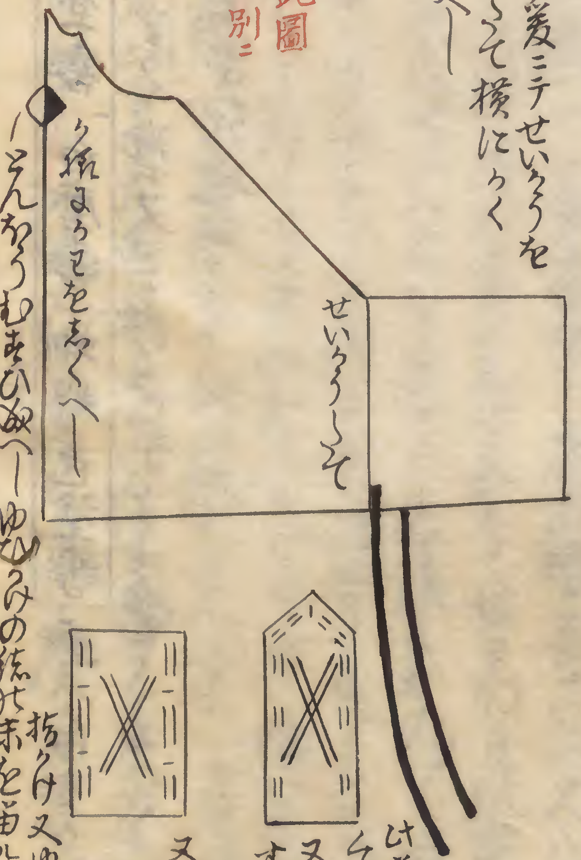
○犬追物方聞書抜書

伊勢下総守平貞頼宗五入道記　永正大永ノ比

犬射小手　おて乃るハ精好を用へし　うらハあるへし　若人なとハ赤きも又むらさき　たんかうなとも用ゐれハて　しほしかるへからず又周防ゟのたし　うちハ金仙寺を可すへし　おきぬにておて残用意ありしとて見せぬひはし　統菖蒲革なるへし　長さ廣さ人によるへし　但廣さ一寸むかりを云　又おそこてと云ハ宿老のもちゐる也　おてをも入なもさす之　又小袖のふちをさす事を云　替前も大かたこの人ハさすへからす　又大かたこれを称す也の総而

貞丈云此圖宜シカラズ別ニ圖アリ

爰ニテせいらうをよそ横にかくへし



かさりむかひぬへし　ゆひめの統ハ赤を用ル也是ハ菖蒲革

指かけ又ゆびぬきとも云

此革残ハ前はたのもの下に可をねをもりハ糸ニテぬけぬひつくへし　又中ハひしハ糸残上と下とへちくへてすちくへてかく形之

又ぬけもあるへし

黒塗轡　白磨轡　蜥蜴(トカゲ)色塗轡

轡ハ白みがきなり 式のよし 勢州(伊勢伊勢守) 貞陸相

伝ハ黒く塗又とかげ色などに塗るハ川くしきる人の事なる也

あるもよき也

○法量物　　小笠原家古傳書　　抜書ニアラズ全篇也

大的　一大的事　的の勢五尺二寸○的と串との間三方八寸下六寸○的場

の遠さ弓杖三十三にて三十二に可立○横串七尺六寸内のり六尺八寸○立

串土より上六尺六寸○串のふとさ口二寸○的の絵小まるこ二尺七寸　三寸

五分　三寸（口伝あし）○せびのふとさ二寸五分

丸物　一　丸物事　弓經八寸○矢たまり四寸（れんせんの絵之）○横串五尺内の四

尺三寸○立串土より上三尺七寸○串のふとさ口一寸四分○あつちのさき

弓杖十二にて十杖に可立串とあつちとの間一杖におちらし

草鹿　一　草鹿事　鹿の勢長さ一尺八寸　広さ八寸　紙のあつさ七寸

五分　法經の長さ三寸五分　せとより此星七　矢あての星四寸（金定まり）

此星八つ四ハ大なるべし　前後におのおの四つ　ちハせとより此あまひ五寸

よこさ後にハ弓經にちおほしてニ不引とおもふべし　鹿の首前へ

むかうたるうちにふあふごとし　　絵ハ弓庭に[illegible]ちあるべし

笠懸　一　笠懸事　的の勢一尺八寸　三寸横手とも云○横串六尺一寸内のり

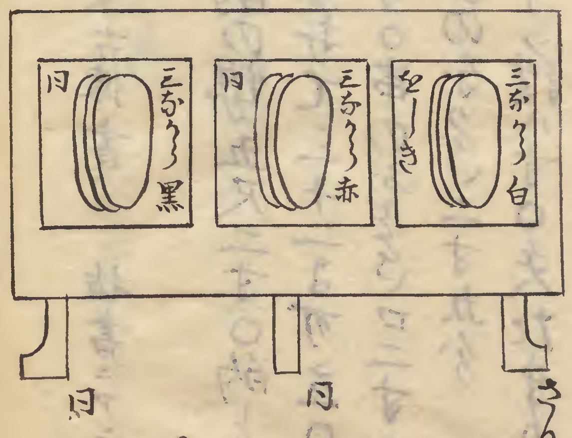
五尺二寸○立串土より上四尺五寸○串のふとさ口一寸六分○らちハたかさ

一尺五寸○的場の遠さ弓杖九杖にて八杖に可立○まと皮の布六の

長さ五尺 もちゐり一尺二寸の布を可用 たちもちりの定 とをりれを一所にはさみとめへし とち所上より一尺二寸とぢりをあいをたるへし 布の色浅黄可有へし ○弓場たけ一町あて其外口傳在之 ○むかひより後の串まで 三三 口傳在之

【小笠懸】一 小笠懸串串のなかさ一尺二寸 板を可用 金ゐてらむ ささみき是を的と 弓走の弓八寸 ○引目 半引目 九目 おりし篦たるへし ○笠懸の弓場をさくさ徒歩よ射あり 射手ち入串を笠懸よりハふかく ひらく串をたるの気ひ中よひらきちく在し 矢むきを守りてうちるへし

【矢開】一 矢開串ハちいさす九 三流 三とをしきおさくへし 勝の数一尺二寸 一尺出も用へし ひろさ六寸 あつさ一寸八分 をしきの上にハ おろかしハ柏葉をたくへし



食手座

食招并条々口傳在之

應永廿七年八月廿八日

小笠原持長 浄元 在判

同満長 興元 在判

文明八年五月廿二日

同 兵部少輔元長 在判

○西行記画巻物

相保画　詞作者未詳　二巻アリ

一本明應五年丙辰巻物修復ノ奥書有之

朝日丸太刀	太刀袋

上巻 勅宣乃りまゐりてつきゆくに御隆子比絵乃所十首を一日の中にしたためて奏しけれハよろしく出来けんよりて所の是的詠末代比きかありとて主殿のゆうき定信時信をめされくそかゝせられける拵（崇徳院）大治二年十月十一日かとよ勅禄に朝日丸とや出むくせをあり北のかし紀の袋に入らく頭無(トウノ)比らけ続り出て返給ひける　○貞丈云右乃太刀袋を絵かきたる錦袋のかしらとありある方にちありとみえてある方をさがりませて緒にてゆひたる形に系りけり○又云右の太刀持侍ハ西行出家ん前乃事なり御隆子ハ鳥羽院新造御所の障子なり

国立公文書館
National Archives of Japan